

淑徳大学短期大学部研究紀要第56号（2017.2）

〈研究ノート〉

保育者養成校における歌唱指導について — 学生の歌うことに関する意識調査をもとに —

諸井サチヨ

（2016年11月3日受理）

要 旨

保育士・幼稚園教諭に求められる能力に、『歌唱力』がある。弾き歌いを問題なく行うために必要である事は周知だが、それ以外にも手遊びやパネルシアターなどの活動でも歌唱が必要になる場合が多々ある。しかも無伴奏の状況で、である。また絵本の読み聞かせなどではしっかりと子どもたちに届く『声』が必要である。歌唱では、子どもたちのお手本となり、正確に歌詞を発語し、正しい音程・リズムで歌い、楽曲の世界を表現する力が必要であり、その他の活動では声によって表現する力が必要である。養成校の短い学びでピアノの演奏技術、歌唱と大変高度なことを習得していかななくてはならないのだが、どのように歌唱指導を行なうべきなのだろうか。調査では、自身の歌唱力に自信がないばかりか、自身の声にすら前向きになれない学生の実態が明らかになった。歌唱技術の問題点や改善点等、調査結果を考慮し、声楽の授業では、今後個別指導の機会を増やし、発表の場を増やすことが必要であるとわかった。少人数体制のピアノレッスン時も歌唱技術のスキルアップにつなげていける場として利用できる可能性がでてきた。今後は『弾き歌い』の指導者側の歌唱指導の問題点を具体的に探り、指導者のサポートにも取り組まなければならないこともわかった。今回の研究を今後にかし、歌唱指導をより充実したものにしていきたい。

キーワード 声、歌、聴く、表現、弾き歌い

1. はじめに

1

前回の論文で、保育者養成校に通う学生の『弾き歌い』のピアノ演奏技術に関して、学生の意識調査を行い、実態、様々な問題点、今後の指導の課題を明らかにした。しかしながら、『弾き歌い』はピアノの演奏技術だけでは成立せず、歌唱も必要不可欠な要素であるため、歌唱の指導も必要になってくる。保育現場で求められる歌唱力についての研究は、音楽教育の一部として扱われているものはあるが、歌唱主体での研究にはまだ不足があると考えられ

る。まず本論文では、学生自身の声や歌唱力、歌うことについて、学生の意識調査を行い、実態を把握していきたい。ピアノの演奏技術習得だけでもピアノの学習歴が初心者である学生にとっては大変困難な状況であるが、保育現場で必要とされる『弾き歌い』を問題なく行うためには、ピアノ演奏以外に『歌唱』という技術も必要で、それらを切り離して考えることはできない。要するに『弾き歌い』は「ピアノ演奏だけ」「歌唱だけ」より難しさが増すのである。A大学短期大学部の場合、歌唱の学習となる科目は1年次に開講されており、ピアノレッスンとは別に「声楽」の授業が設けられている。しかし、たった1年で、実習に十分対応でき、さらには将来現場で保育を行うのに十分な技術を習得できるものなのであろうか。歌唱については『弾き歌い』だけではなく、『手遊び』や『パネルシアター』の活動でも必要になってくる。また声を発する、声で表現するという行為で言うならば、『絵本の読み聞かせ』や『紙芝居を演じる』という活動にも関係してくる。保育現場では、声を出す、歌を歌うという行為が必要不可欠であるという事だ。ピアノよりも必要な技術と言えるかもしれない。学生達が現在、声を使うという事、歌を歌うという事をどのように感じているのかをこの調査・研究を通して明らかにし、どのような問題点、改善点があるのかを見出し、今後の『弾き歌い』の歌唱指導をさらに充実したものにしていきたい。

2. 方法

2-1：調査対象者の履修状況〔音楽科目：音楽Ⅰ（声楽）〕

調査対象者は、2年間保育者養成校で学ぶ学生である。『歌唱』の技術習得に直接連携している科目として、A大学短期大学部では、1年次に『音楽Ⅰ』を開講している。『音楽Ⅰ』はピアノレッスンの時間と声楽（歌唱、音楽の基礎）の時間に分けられている。『音楽Ⅰ』は保育士資格・幼稚園教諭二種免許取得のための必須科目で、全員が、1年次で履修する科目である。2年次には『音楽Ⅱ』という選択必須科目が開講されており、選択すれば履修可能である。ただし、『音楽Ⅱ』ではピアノレッスンのみであるため、歌唱について学ぶ機会はない状況である。

2-2：調査方法

調査対象 A大学短期大学部1年次在籍学生250名（平成28年4月入学）
 回答者数 237名（回収率：95%）
 調査期間 平成27年7月 前期講義内 科目：音楽Ⅰ（声楽）
 調査方法 選択方式アンケート、一部自由記述を含む（無記名で実施）
 調査項目 <自身の声について>、<歌うことについて>、<保育士・幼稚園教諭に必要な声、歌唱力について>、<自身の歌唱技術の課題について> 他 詳細については以下に述べる。

※調査結果の公表は了承を得られている。

3. 調査結果と考察

3-a 自身の声について（図1）

まず、〈自身の声についてどのように感じているか〉を調査したところ、自分の声について、「好きでも嫌いでもなく、考えた事がない」と答えた学生が、全体の49%で最も多かった。自分の声にあまり関心がないということがわかった。それとおおよそ同じ割合で46%の学生が自分の声を〈嫌いだ〉と答えた。自分の声を〈好きだ〉と言える学生が全体の5%の12人しかいないこともわかった。

嫌いな理由として多かったのが、「声が低いから」、「高い声が出ないから」、「声が通らないから」というものであった。その他には、「変な声だと思うから」、「きれいな声ではないから」、「鼻声だから」、「気持ち悪いから」と声質に関する回答もあった。少数ではあるが自分の声を「好きだ」と答える学生がいたが、その理由としては「声がよく出るから」や「自分の声だから」、「高くもなく低くもなく、ベストな声だから」という理由があげられた。

自分の声については、好きだと答えた学生が大変少なく、残念な結果であった。自分の声を好きになることができれば、日々の練習にも前向きになることができるはずだ。気持ちの問題が大きく影響するだろう。自分の声を好きだと回答した学生の理由にもあったように「自分の声だから好きだ」と答えられるほど自身の声を前向きにとらえることができれば、歌を歌うことにも、そしてその先にある弾き歌いの練習にも積極的に取り組めるようになるはずだ。自分の声が嫌いだと答えた理由のなかには、自身の声に持っているイメージが大変ネガティブなものが多くみられた。「高い声が出ない」や「音域がせまい」などの技術的なネガティブ要因は、今後のトレーニング次第で解決できる可能性は十分にあるが、自身の声そのものを「気持ち悪い」、「きれいじゃない」ととらえている場合は、気持ちの問題が大きく関係してくるため、歌唱指導にも日々の自主練習にも積極的に取り組めなくなると推察される。ただ、様々な理由で自分の声は嫌いだとしても、歌うことが好きな学生もいるという調査結果が出ているので、この点をふまえ授業運営をすればいい効果につながると考えられる。

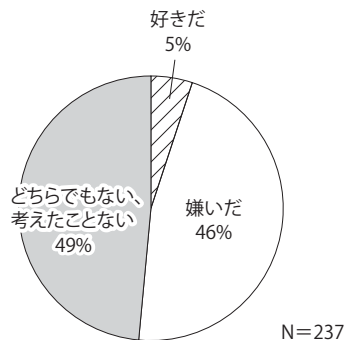


図1 自身の声について

3－b 歌うことについて（図2）

歌うことについて、「好きだ、どちらかというとき好きだ」と答えた学生は75%であった。「嫌いだ」と答えた学生は5%で少なかった。歌うことに関しては、「好きだ」と答えた学生の方が「嫌いだ」と答える学生より多く、自身の声についての質問の回答とは逆の結果となった。「好きでも嫌いでもない」と答えた学生は21%であった。

歌うことが好きだと答えた理由として、「楽しい」という回答が圧倒的に多かった。「ストレス発散になるから」や「歌が好きだから」という理由も多かった。その他には、「カラオケが好きだから」や「大声で歌うとすっきりするから」、「元気になるから」、「音楽が好きだから」等の回答もあった。嫌いだと言う理由では、「音痴だから」や「下手だと思うから」があった。

歌うことは「好きだ」という回答が多く、今後の歌唱指導にもいい影響が期待できそうだが、「人前で、一人歌う」ということになるとうどうであろうか。例えば、カラオケで友人と楽しみながら歌ったり、自室などの一人になれる空間で好きなアーティストの曲を鼻歌まじりに歌ったり、口ずさんだりすることはあまり抵抗を感じずにできるのではないかと考えられる。しかし、保育者に求められている歌唱力というのは、『弾き歌い』での歌唱、子どもたちのお手本としての歌唱であり、『弾き歌い』時の歌唱には、ある程度の歌唱技術と表現力が求められる。そのため、歌うことを専門的に学んでいない学生にとっては、弾き歌いを行なう場合、ピアノだけでなく『歌唱』も大変厳しい課題であると言える。さらには、子どもたちの前とは言え、一人で注目をあびながら、という環境下でおこなわなければならない。余計なプレッシャーを感じることなく楽しく歌うことができる環境下なら、それがストレス発散になり、気分があがったり、元気になるたり、精神的にプラスの効果がある“歌うこと”が、「人前で、一人で歌う」ことで結果的にストレスを感じてしまうことにもなりかねない。このように非常にデリケートな問題も考慮しなくてはならないため、授業内の歌唱指導では学生の個々の状態に寄り添い、丁寧に指導をしていく工夫が必要になってくる。そうしなければ、自身の声をますます嫌いになり、現時点では歌うことに積極的な学生の意欲低下にもつながってしまう。また、自身の歌唱について「音痴」と認識している学生の中には、実際は音痴でない場合もある。なぜ音痴だと思うのかとずねると、たいていの場合「小さい頃に家族にそう言われたことがある」と答える。幼い頃の他者から受けた評価は大人になっても影響を与えているということがわかる。

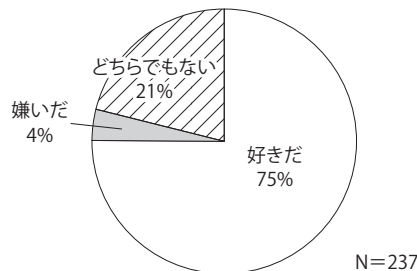


図2 歌うことについて

3-b' 〈歌うことをどのように感じているか〉との質問には、やはり「難しいと感じる」という回答が一番多く、62%であった。「簡単だ」という回答は17%しかなかった。回答に「その他」を選んだ学生が15%おり、その具体的な内容としては、「楽しい」や「人前でなければ簡単」というものであった。歌うことに「興味がない」と答えた学生が14人いることもわかった。

歌うことは楽しいが、その「楽しい」は、ただ趣味としてまたは複数人で歌っている、鼻歌程度に歌うだけなら、楽しく簡単に感じられるということだろう。しかし、保育者を目指す養成校に通う学生にとっては、声を発すること、歌を歌うことが、将来仕事と密接に結びつくものであるため、ただ単に「楽しい」だけのものとして捉えることが難しいということが考えられる。また自身の歌唱力を客観的に評価している面もあり、歌うこと自体は楽しく好きだが、問題なく歌えているかという技術面では難しいということだ。入学後に歌うことに対する意識に変化があったとも考えられ、「人前でなければ簡単」と答えた学生がいたように、「人前で」という状況がさらに歌うことを難しく感じさせている可能性もある。

3-c 歌をどの程度歌っているか（図3）

〈普段、歌をどの程度歌っているか〉の質問では、「ほぼ毎日歌っている」と答えた学生が49%で最も多かった。「友人とカラオケに行った時などは歌う」と答えた学生も40%と多い事がわかった。「弾き歌いの練習時のみ、授業内のみ」と答えたのが7%、「歌わない、歌いたくない」と答えた学生が3%であった。

「弾き歌いの練習」というしっかりした練習の形態でなくても、なんらかの方法で、ほぼ毎日歌っている学生が半数いたことは、歌うことが身近になっているということだ。ごく少数ではあるが、「歌いたくない」と答えている学生がいることは注目すべきであり、今後の歌唱に関しての取り組みや授業でのアプローチの仕方を間違えば、そういう学生が今以上に増える可能性もあるということだ。

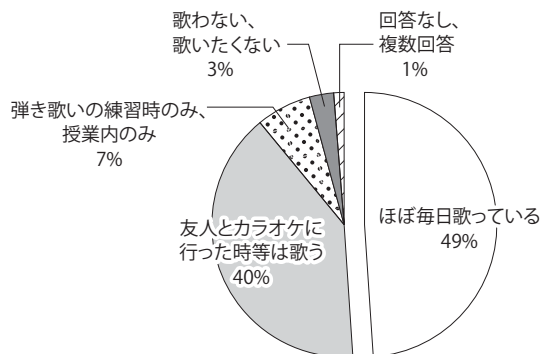


図3 どの程度歌を歌っているか

3-d 自身の園生活での歌唱活動について（図4）

〈幼稚園や保育園に通っていた頃、園生活で歌を歌っていたか〉という質問には、「よく歌っていた」と回答した学生が最も多く、177人であった。「時々歌っていた」と答えた学生も32人おり、よく歌っていたと時々歌っていたという回答を合わせると全体の88%にもなった。園生活では歌唱が欠かせないという事がわかる結果だ。「あまり歌わなかった」が12人で、「記憶にない」が16人であった。

このアンケートの調査結果からもわかるように、園生活では歌唱活動が必須事項で行われている。「おべんとう」、「おかえりのうた」や季節ごとの幼児歌曲、園歌があるように、園生活では歌を歌う場面が多いのだ。歌唱などの音楽活動にかかわるものは、『表現』という項目に関係している。幼稚園教育要領には、内容として「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう¹⁾」そして保育所保育指針には、「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ²⁾」、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう³⁾」と書かれているように、園生活での歌唱活動は非常に重要な役割を担っている。幼児期の音楽とのふれ合いが子どもたちの表現の手段でもあり、音楽活動の楽しさを味わうことが、その後小学校以降における音楽の学びにもつながるため、保育者は出来る限り、音楽活動を十分に行えるだけの能力を身につけておかなければならない。

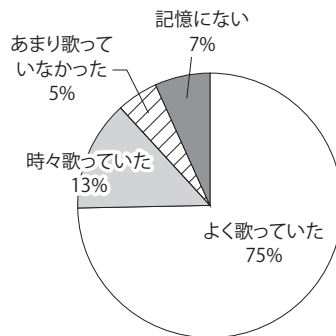


図4 自身の園生活での歌唱活動について

3-e 保育士・幼稚園教諭に望ましい声、歌唱力について（図5）（図6）（図7）

〈保育士・幼稚園教諭に必要な声について〉は、「しっかり通る声が良い」と答えた学生が83%と大変多かった。「声のボリュームや質は問題でない」と答えた学生は15%と少なかった。その他、「よくわからない」と答えた学生もいた。

また、〈保育士・幼稚園教諭に必要な歌唱力について〉の質問には、「歌えないと問題だ」と答えた学生が最も多く、76%であった。しかしながら、「歌えなくても問題ない」と答えた学生が11%もいた。その他には「よくわからない」と答えた学生が13%であった。

さらに〈保育士・幼稚園教諭に必要な声や歌唱力について入学前と入学後に授業を受けてから考えや意識に変化があったか〉という問いには、31%の学生が「変化があった」と答

えた。「変化はない」は39%で、「考えた事ない」は29%であった。

保育では、これまで述べてきた歌唱活動の他に、様々な場面で「声」を使う。保育者には、子どもたちのよく通る声に対応できる「声」が必要なのは当然である。養成校に入学するまでの生活を振り返った時、部活動の応援等で大きな声を出すことはあっても、教室中に響くような通る声を意識して発声する事はほとんどなかっただろう。これまであまり考えたことがなかった発声や呼吸についても保育者にとっては必要な要素であり、叫んだ大声ではなく、よく通る声が出せる技術も保育者には必要である。「よく通る声」を出すためには、正しい呼吸法と発声法を習得しなくてはならない。喉が強い、弱い、の元々の性質の問題も多少はあるが、実習のたった2週間でさえ普段使い慣れない大声を多用するせいで、声をからしてしまったり、声が出なくなってしまったりする学生がいる。そういった無駄な声枯れを防ぐためにも、正しく声を出すという意識を入学後早い段階で持ってもらえるように指導していくことも必要である。「手遊び」「絵本の読み聞かせ」などの活動でも子どもたちにしっかり届く声が必要となるため、保育という仕事は声を使う仕事だという認識を持ってもらう事が大切である。入学前と入学後の意識の変化については、変化があったと答える学生も多くいたが、変わらないと答えた学生の数の方が多いという結果がでているため、保育者に必要な声や歌唱力を意識できるような授業運営を考えなければならない。

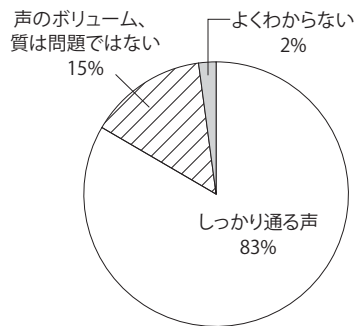


図5 保育士・幼稚園教諭に望ましい声について

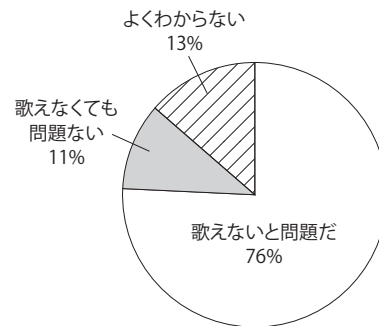


図6 保育士・幼稚園教諭に必要な歌唱力について

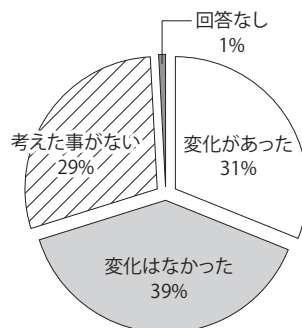


図7 入学前と入学後の意識の変化について

3－f 弾き歌いを行う時の歌唱について（図8）

〈弾き歌い時の歌唱について〉は、「歌は得意だが、弾き歌いになると歌いづらい」と答えた学生が120人と最も多かった。弾き歌いではピアノの演奏も同時に行うため、ピアノ演奏が得意でない学生にとっては、歌唱単独より難しさが増す。またピアノが得意な学生にとっても容易でないことがわかった。「歌は苦手なので弾き歌いになるとさらに歌いづらい、もしくは歌えない」という回答は31％であった。歌うことが苦手な学生にとっては、他の事と同時にやる弾き歌いの歌唱はいろいろなところに神経を使わなくてはならないので、大変困難なことだとわかる。その一方で、「正しい音程で問題なく歌えている」と答えた学生が42人もいた。

弾き歌い時の歌唱については、ピアノを弾きながら歌わなくてはならないので、ピアノの専門家、歌の専門家にとってもそんなに容易いことではないだろう。そのように高度なことをピアノ初心者の学生が短い期間に修得しなくてはならない。弾き歌いのレッスン時に学生の様子をみていると、ピアノが初心者の学生は、曲の始めは弾き歌いになっていても、数小節進むといつの間にかピアノだけになってしまい、歌っていないのだ。こちらが、歌っていない事を指摘すると驚いたような表情をする。つまり、歌っていない事すらも気づかず、さらに自身の状況がわからなくなるほどピアノ演奏に全神経を使っているのだ。ピアノが得意な学生でも、全く歌が無くなってしまふということはないにしても、ただ“ぼそぼそ”と弱い声で何かをとこなえているようになってしまふこともある。ピアノを弾くことと歌をうたうことを同時に行う「弾き歌い」がいかに難しいかが理解できる。

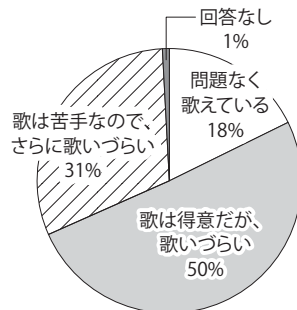


図8 弾き歌い時の歌唱について

3－g 現時点での自身の歌唱技術について（図9）

〈自身の歌唱技術について、いまずぐ実習や現場に出ることが可能か〉という問いには、「まだ自信がない」と答えた学生が173人で最も多かった。少数ではあるが、「いまずぐ実習や現場に出ても問題ない」と答えた学生が11人いることがわかった。歌唱について、自信を持っている学生も少数だがいる事がわかった。「よくわからない」と答えた学生は48人であった。

アンケート調査を行った時期が入学してからおよそ3ヶ月が経った頃ということもあ

り、まだ自身の歌唱技術については自信をもてないと回答した学生がほとんどであった。実習は1年次から始まるため、少しでも多くの学生が自身のピアノ技術、歌唱技術、そして「弾き歌い」の技術について自信をもてるように指導していかなくてはならない。効率の良い指導のあり方、歌唱力アップのためのカリキュラムを考えていかなければならない。

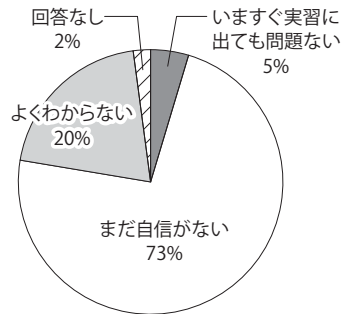


図9 自身の歌唱技術について

3-h 自身の歌唱における問題点について

〈自分自身の歌唱の問題点は何ですか〉との問いに、「高い声がでにくい」と回答した学生が127人と多かった。歌唱の場合、音域が歌の苦手意識、歌唱活動への積極性に大きく影響するという事がわかった。また、「人前で歌うのが苦手」と答えた学生も102人で多く、音域という問題が生じる以前に精神的な要因がかなり影響しているという事がわかった。他には、「声が小さい」や「音程がとれない」、そして「息が続かない」などの問題があげられた。自身の歌唱の問題点については学生なりに分析して答えられていた。

音域については、幼児歌曲の中には、高音域のものも多く、いわゆる地声のままだと歌いづらい音域のものがあるため、「高い声がでにくい」という回答につながったと考えられる。高音域を歌うためには、地声だけでなく、裏声も合わせた声が使えるようにならなければならないが、普段使い慣れない発声法になるため、修得するには時間がかかる。地声から裏声にかわると急に声量も乏しく感じられる場合があるため、発声法と同時に呼吸法も身につける必要がある。

幼児歌曲は譜面上、易しいようにみえるが、弾き歌いになると、子どもたちが歌い易い速さで、歌詞がしっかり伝わるように、さらには楽曲の持つ世界、雰囲気などをピアノと声で表現して伝えていかなければならないため、音楽的な技術だけでなく、言葉を正しく伝えられる発音も必要になる。歌唱についての問題点だけでなく、表現力など、その他にも課題は多い。

9

3-i 歌に費やす時間について

〈入学後の日頃歌うことに費やす時間に変化があったかどうか〉の質問には、「入学後、歌う時間が増えた」という回答が68%であった。「減った」と答えた学生はたったの2%であ

った。ほとんどの学生が、入学前と入学後で、歌う時間は「増えたかわからない」という結果になった。

歌唱の練習については、前回の論文で述べたピアノの練習時間同様に、音を出すものなので、場所や時間帯に神経を使わなければならない。ピアノと違って、自分の体が楽器なので、楽器が必要ないという点ではピアノよりは手軽に練習ができる。ただ、正しい音程を取りながらの練習が必要になるので、ピアノで音が取れるような環境で練習できるのが理想である。弾き歌いに限らず、保育では歌を歌う場面は多いため、手遊びなど無伴奏での活動時に自信をもって歌えるようになるためにも、音程を確認しながらの練習は必要である。ピアノの練習時に歌唱単独での練習時間も確保できるような練習をすることが理想である。

3-j 歌唱技術のレベルアップについて（表1）

〈歌唱技術の課題解決やレベルアップのためにはどうすべきか〉の質問には、ほとんどの学生が「たくさん練習する、たくさん歌う」と答えた。その他には、「個人指導を受ける」が35人、「発声法や呼吸法を学ぶ」が23人、「ピアノでしっかり音を取りながら歌う」が13人、「自分の声をよく聴く」等、聴くことに着目した回答が11人、「人前で歌う」や「場数をふむ」が8人であった。

歌唱力のレベルアップのためにどのような方法があるのかについては、学生なりによく考えられている回答が出ている。「たくさん練習する」と答えた学生が多かったが、ピアノレッスンのために『弾き歌い』の練習はしているだろうが、ほとんどがピアノだけの練習に時間をとられていて、歌唱自体の練習までたどりついていないという事だと考えられる。さらには練習量が足りないという認識を持っているのだと思われる。学業以外にアルバイトもある状況で、残りの時間を歌唱や弾き歌いだけに費やすことはなかなか難しい。効率のよい練習方法を提示するなど、練習においても指導者側が適切にアドバイスのできるような取り組みが必要である。「個人指導を受ける」や「場数をふむ」に関しては、授業内での発表の機会を増やし、個人指導の機会を複数回設けるなどして、授業自体にさらに工夫することで早急に解決できる可能性はある。歌唱では、しっかりと正しい音程で歌うことも重要で、手遊びやパネルシアターでは無伴奏で歌うことも多いため、楽器に頼らずに自分の声だけで、正

表1 歌唱技術をレベルアップさせるには

	(人)	(%)
たくさん歌う・たくさん練習する	101	51
個人指導を受ける	35	17
発声法や呼吸法を学ぶ	23	11
ピアノでしっかり音を取りながら歌う	13	7
自分の歌をよく聴く、友人と聴かせ合う	11	6
人前で歌う・場数をふむ	8	4
授業をしっかり受ける	8	4

しい音程で自信を持って表現できる能力も必要である。学生の回答にもあったように「ピアノでしっかり音を取りながら歌う」練習はもちろん、自分の演奏や他者の演奏を聴く（鑑賞）機会をこれまで以上に設けながら、聴く耳を鍛えていくことも重要である。

3-k 1クラスの人数について（図10）

〈50人編成での声楽の授業をどのように感じているか〉との問いには、「人数が多すぎる」と答えた学生が69人であった。「ちょうどよい」と回答した学生は160人と多かった。「多すぎる」と答えた学生にはどの程度の人数での授業を望むか調査した。その結果、一番多かった数は25人編成であった。現在の半分の人数である。

声楽の授業は、現在50人編成で行われている。指導する側の見解としては、1クラス50人は多すぎるというものだが、学生は指導者側が考えるほど不自由に感じていないことが理解できた。ただ、現在よりも個別指導の場や発表の場を増やそうとすると50人編成では授業運営が厳しいというのが本音だ。1クラスあたりの人数については改良すべきだと考えるが、まずはピアノの授業内でも歌唱をもっと意識できるような指導を行なう等、ピアノレッスンの時間の有効活用を考える必要がある。

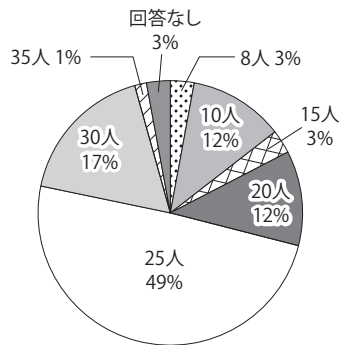


図10 適正だと考える1クラスの人数

4. まとめ

保育の場面では、子どもたちの歌いやすい速さ、楽曲に相応しい伴奏型で、寄り添うように歌いながら伴奏する事が望まれる。そのため、養成校での2年間のピアノ実技を含む音楽科目の学びの最終目的は、技術面では、ピアノ技術の向上だけでなく、保育に十分な歌唱力を身につける事でもある⁴⁾、と先の論文で述べてきた。ピアノの学習経験がほとんどない学生は、ピアノの技術習得が優先になり、歌唱についてはなかなか気がまわらない状態だろう。たとえ、ピアノが得意な学生であっても、それほど自身の歌唱について考えてみたことはないだろう。しかし、実習や園での子どもたちの生活を考えると、歌唱活動は必須で、歌唱以外にも、声で表現しなくてはならない場面が多い。そして、歌唱活動もその他の声を使

う活動もすべて「表現力」が必要となる。言葉を正しく発音し、伝え、音程を正しく取り、歌い、子どもたちにしっかり届くように、そして子どもたちの手本となるような歌唱をしなくてはならない。さらには楽曲の世界や物語の世界を表現していかななくてはならない。手遊び等では、無伴奏で行う場合もあるため、歌うことの難しさがより一層増す。実習中の学生の様子を見させていただくことがあるが、部分実習で絵本の読み聞かせを行なっていると、たいてい、顔の表情がかたくこわばっていたり、声も不安定で弱くなっていたりすることが多い。同様に弾き歌いでは、やはりピアノ演奏を滞りなく行うことに集中してしまい、歌声は小さく、何を言っているのか、歌詞すら聞き取れない事もある。子ども達の前で十分に歌唱や読み聞かせができないことで、自信喪失にもつながってしまう。

ピアノのテクニックだけでなく、歌唱技術の修得にも問題が多いと言える。学生自身、歌唱の難しさは理解していることが今回の調査で明らかとなり、自身の歌唱技術の問題点は短期間で完全に克服できる内容のものではないが、指導の工夫で改善できる部分もあると考えられる。まずは、保育士・幼稚園教諭は「声」を使う仕事であることを普段から認識してもらうためにも、保育の場面での歌唱活動や絵本の読み聞かせのような「声」を使う活動について考えてもらい、自身の声について客観的に考えてもらう事も大切だ。人前で歌うとほとんどの場合、精神的なプレッシャーを感じて思うように声が出ない。これは、保育士・幼稚園教諭を目指す学生に限らずそうである。緊張してもある程度その緊張の影響を受けないですむような呼吸法、発声法をわかりやすく指導することが大切だと考えられる。体の支えの問題、息の吸い方の問題、声を響かせる問題など、プロの歌手にとっても難しい技術を学ばなくてはならないが、できる限り、学生が歌うことを嫌にならないようなアプローチを進めていくことが大切だ。ピアノのカリキュラムのように練習曲ばかりを多用せず、将来必要になる幼児歌曲を多く歌いながら、歌唱技術の修得につながる指導が必要である。既にピアノレッスンのカリキュラムを改良し、バイエルなどの練習曲よりも幼児歌曲中心にしているため、ピアノの時間にも以前よりは歌う時間が増えていると考えられるので、その点においては、歌唱力の向上につながっていると考えられる。声楽の授業内では、幼児歌曲だけでなく、学生の好きなアーティストの曲やディズニー曲等、学生が歌いたいと思う曲、歌い易い曲も時折扱い、発声法の改善に役立てることも大切である。また、グループでの発表や個人での発表の機会を増やしていくべきだと考えられる。授業であっても、人前に立った時の精神状態を体験し、緊張下での自身の声や歌唱、顔の筋肉、体がどのように変化するかを知ることで、それぞれに合った改善策を見出すことにもつながっていく。要するに「場数をふむ」ということだ。

12

「弾き歌い」のレッスンを担当する指導者側はピアノの専門家が多く、どうしても指使いや伴奏型などに注意がいきってしまうがちのレッスンになってしまう。ピアノ経験が初心者 of 学生に何としてもピアノが弾けるようになって欲しいとの願いもあるのでやむを得ないが、「ピアノが弾けるようになったら歌う」では、養成校の短い学びでは間に合わない。なるべく初期の段階から歌を積極的に歌うようにできるレッスンを展開しなければ弾き歌い時の歌唱技術は実らない。また、指導者も学生の演奏に合わせて歌うことができれば、学生はその

歌声を耳で聴き、「弾きながら歌う」イメージが持てるだろう。さらには、レッスンを受けていない学生にとってはただレッスンを聴いているだけではなく、レッスンを受けている学生のピアノに合わせて歌ってみるという事も大切である。このように、声楽の授業内、ピアノのレッスン内で改善できることは改善し、学生一人一人の問題点には、個別指導で対応していくことが重要である。

これまで、学生のピアノ、歌唱に関する意識調査を行い、様々な問題点や改善点を見出してきたが、今後は指導する側の指導力の向上にも取り組んでいかななくてはならない。ピアノレッスンを担当している教員が「弾き歌い」という活動について、認識や理解を深め、指導内容の統一を追求していくべきだろう。

今後も声楽の授業やピアノレッスンを通して、学生が実習でも卒業してからも現場で子どもたちと楽しみながら、自信を持って、歌唱活動が行えるように、指導していく所存である。

引用文献

- 引用1)～3) 内閣府、文部科学省、厚生労働省 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針〈原本〉チャイルド本社 2014 p.40、p.60～61
- 引用4) 諸井サチヨ 保育者養成校での『弾き歌い』指導に関する一考察 淑徳大学短期大学部研究紀要第55号p.88 2016